

松江藩儒黒澤石斎の研究（二）

西島太郎

はじめに

別々に研究されてきた。

伊勢における研究は、一九一四年に発表された大西源一「與村弘正の墓及其の事蹟一班」（『三重県史談会々誌』四一一二）に始まる。伊勢に残る石斎の実家である與村家の墓誌を発掘し、報告したものである。その後、一九三四年に度会郷友会の編纂で『度会人物誌』（同会刊）が刊行され、石斎の事跡が紹介されたが、叙述の根拠は示されなかった。その根拠となつたと思われる喜早（度会）清在の記した隨筆「匪炉間談」が、一九四〇年刊行の神宮司庁編纂『大神宮叢書神宮隨筆大成前篇』に収められたが、注目する人はいず、松江においても参考されることはない。

松江における石斎研究は、一九一六年刊行の桃好裕『松江藩祖直政公事蹟』（山陽新報社）や、一九四一年に刊行された『松江市誌』（松江市庁）『島根儒林伝』（谷口廻瀬先生還暦記念刊行会）で、石斎を「松江藩儒の鼻祖」と位置づけ評価した。石斎は、松江藩に関わる著作だけでなく、幕府の儒官である林羅山のもとで『寛永諸家系図伝』の清和源氏の項の編纂に携わり、かつ日本で最初の女性史『本朝列女伝』を編纂しており、日本史上でも注目される人物なのである。

石斎の研究は、その出身地である伊勢（三重県）における研究と、儒者として仕えた出雲松江（島根県）での研究の二つに大別され、それぞれ

に止まる。

石斎の研究は、その出身地である伊勢（三重県）における研究と、儒者として仕えた出雲松江（島根県）での研究の二つに大別され、それぞれ

に止まる。

石斎の研究は、その出身地である伊勢（三重県）における研究と、儒者として仕えた出雲松江（島根県）での研究の二つに大別され、それぞれ

に止まる。

石斎の研究は、その出身地である伊勢（三重県）における研究と、儒者として仕えた出雲松江（島根県）での研究の二つに大別され、それぞれ

に止まる。

石斎の研究は、その出身地である伊勢（三重県）における研究と、儒者として仕えた出雲松江（島根県）での研究の二つに大別され、それぞれ

に止まる。

石斎の研究は、その出身地である伊勢（三重県）における研究と、儒者として仕えた出雲松江（島根県）での研究の二つに大別され、それぞ

この様に、石斎研究は、戦前の研究が主を占め、伊勢と松江でそれぞれ個別に研究が進んでいた。個別に進んだ研究を、総合的に検討していく必要があろう。

斎をとりあげる。

本稿は、一〇一二年一二月二二日から翌年一月一一日まで松江歴史館で開催された企画展「松江藩士の江戸時代——雨森・黒澤両家の伝来史料から」を準備する過程で、明らかになつたことを記す。企画展では、石斎の生い立ちや馬との関わり、石斎著述一覧など、初めて明らかにされたことも多くあつたが、展示では分りやすく解説する事が第一に求められるため、個々の根拠を明示することができなかつた。本稿において、その根拠を明示すると共に、企画展では触れられなかつた事実にも触れ、新たな石斎像を提示したい。

本研究および企画展が開催できたのも、数年前に黒澤家（松江市在住）から松江歴史館（寄託時は歴史資料館整備室）へ史料群を寄託していただき

いたことが大きい。松江歴史館開館準備段階にあつたこともあり、基本展示室には石斎の肖像画のレプリカを展示し、松江藩の教育の始まりを石斎から説き起こすことができた。寄託された史料のうち、石斎の長男である長顕が著した父石斎の年譜は、同時代の石斎を語る根本史料として重要である。この年譜は、部分的に谷口廻瀬氏が『島根儒林伝』の「黒澤石斎」執筆のために利用されたが、本格的分析はなされておらず、この年譜および関連史料の調査により、石斎の事跡はより詳細に明らかにできる。

本稿は、松平家松江藩の初期の藩政に影響を与え、日本初の女性史ともいべき『本朝列女伝』を編纂した、松江藩初の儒者である黒澤石斎の事績を明らかにして、その思想についても検討しようとするものである。とくに今回（「松江藩儒黒澤石斎の研究（一）」）は、松江藩に仕えるまでの石

—伊勢における石斎の事跡

——享保一九年（一七三四）成立「囲炉間談」——

これまでの研究で知られていた、黒澤石斎の最も古い伝記史料は、佐野正巳氏が指摘するように、昭和九年（一九三四）刊行の『度会人物誌』（度会郷友会編・刊）である。佐野氏はその全文を掲載し、谷口廻瀬の『島根儒林伝』（一九四〇年）所収の「黒澤石斎」や、斎藤恵太郎の『二十六大藩の藩学と士風』（一九四四年）所収の「馬において士精神を構成した雲州の松平」など、その素材とした資料の大半が『度会人物誌』の文によつていることを指摘された（佐野「黒澤石斎とその周囲」『松江藩学芸史の研究』漢学篇』一九八一年）。

しかし、『度会人物誌』の記事が、何を素材に記しているのかは不明であった。次に挙げる史料は、『度会人物誌』の記事が素材とした史料と考えられ、同書では省略されていた、多くの石斎に関する事跡を明らかにしてくれる。そのため、原文を全て掲載し検討したい。

その史料とは、伊勢国（喜早（度会）清在の記した隨筆で、享保一九年（一七三四）一〇月に完成した「いろかんだん」『大神宮叢書』神宮隨筆大成 前篇』神宮司庁編輯、西濃印刷株式会社岐阜支店刊、一九四〇年）のなかの記事である。この書は清在が亡くなる二年前に完成した隨筆で、彼の見聞したもののなか、人に語ることのできるものを収録し、内容は多岐にわたる（『同』解題）。黒澤石斎は延宝六年（一六七八）に没しているので、必ずしも同時代史料とはいえない。しかし、「囲炉間談」には、享保

黒澤石斎年表

和暦	西暦	事件	石斎の動き
慶長17 元和9 寛永6 寛永7 寛永14 寛永16 寛永18 寛永20 正保元 慶安4 承応2 明暦元 寛文元 寛文2 寛文6 寛文7 寛文8 延宝元 延宝4 延宝6	1612 1623 1629 1630 1637 1639 1641 1643 1645 1651 1653 1655 1661 1662 1666 1667 1668 1673 1676 1678	與村弘忠（黒澤石斎・元祖）、伊勢（三重県）で生まれる 石斎（元祖）、元服（12歳） 石斎（元祖）、伊勢を出て江戸へ行く（18歳）。同郷の画工・猪野等室を頼る 旗本・黒澤定幸に仕える。黒澤姓を名乗る 石斎（元祖）、黒澤定幸と共に、陸奥・出羽（青森・新潟）へ旅する（1633・39年も 陸奥へ赴く） 松平直政、出雲入国 ポルトガル船の来航 禁止 鎖国の完成 松平綱隆、2代藩主となる 松平綱隆、2代藩主となる	與村弘忠（黒澤石斎・元祖）、伊勢（三重県）で生まれる 石斎（元祖）、元服（12歳） 石斎（元祖）、伊勢を出て江戸へ行く（18歳）。同郷の画工・猪野等室を頼る 旗本・黒澤定幸に仕える。黒澤姓を名乗る 石斎（元祖）、黒澤定幸と共に、陸奥・出羽（青森・新潟）へ旅する（1633・39年も 陸奥へ赴く） 幕府の儒官・林羅山のもとで学ぶ（28歳） 石斎（元祖）、羅山の子春如らと共に、幕府編纂の系譜「寛永諸家系図伝」清和源氏 の項を担当する 松江藩主・松平直政にスカウトされ松江藩の儒者となる（200石）30歳 石斎（元祖）、江戸で朝鮮人朴真と詩賦の遣り取りをする 石斎（元祖）、100石加増される（300石） 石斎（元祖）、采地（神門郡稗原村、大原郡仁和寺村、出雲郡庄原村等）を得る 石斎（元祖）、次藩主松平綱隆と共に初めて出雲へ入国する（42歳） 石斎（元祖）、「本朝列女伝」を完成させる 石斎（元祖）、「懐橘談」を完成させる 石斎（元祖）、100石加増される（400石） 石斎（元祖）、200石（楯縫郡国富村、神戸郡遙堪村）加増される（600石） 石斎（元祖）、藩から初代藩主松平直政・2代綱隆の年譜作成を命ぜられる。また藩 士の先祖調査（後の「列士録」）も命ぜられる 石斎（元祖）、200石（能義郡中村、大原郡織部村、神門郡常松村）加増される（800 石） 石斎（元祖）、200石（仁多郡大呂村、飯石郡中野村）加増される（1000石）63歳 黒澤長顕（2代）、家督を継ぐ（700石）28歳 石斎（元祖）、出雲で亡くなる（67歳）

二年（一七一七）に黒澤長尚によつて完成した『雲陽誌』を、黒澤石斎の孫で、藩の大坂屋敷の留守居役であった黒澤源兵衛に、大坂で直接会つて閲覧している記事も記しているので、そのような折に見聞したものと考えられる。石斎の子もしくは孫の代における、石斎の事跡を伝え聞いたものとして、相当の真実を含んでいるものと考えられる。

「匂炉間談」を収載する『大神宮叢書 神宮隨筆大成 前篇』では、神宮文庫本三種の校訂を経て活字化している。底本は、元文元年（一七三六）五月二八日に「別宮土宮玉串内人宮原高義」が書写したもので、翌年五月一八日に「権禰宜正五位下度会神主卓彦」が再度書写したものである。校訂本は、イ本として、宝曆元年（一七五一）一一月六日に「従四位上度会正武」が書写したもの用い、口本（明記はしていないが、他の用例からそのように考へざるを得ない）として、安永八年（一七七九）六月に秦定賢が書写したもの用いている。底本は、本書が成つて二年後のものであり、清在が記した原本からの書写と推察される。左に関連部分をあげる。

與村弘正力祖ハ北畠家ノ庶子ニテ、多氣繁栄ノ時四箇村ヲ分チ領ス、
故ニ郷民等四村殿ト称す、後ニ四ヲ與ニ改ム、多氣滅テ後山田西河原
ト云、其時ノ長官常晨ノ家來分ナル故ニ、常ニ彼家ニ仕令セラル、次
称ス、弘正カ父モ三之丞ト号ス、子二人アリ、兄ハ弘正ナリ弟ハ次郎
ト云、其時ノ長官常晨ノ家來分ナル故ニ、常ニ彼家ニ仕令セラル、次
郎乏クシテ常ニウンケン島ノ服ヲ著ル、故ニ傍輩等晒ヒテ次郎ト云ズ
シテ、毎ニウンケン島ト呼フ、次郎少年ナガラ此ヲ耻憤リテ或時父母
ニ告テ云、明日好同行アリ、朝熊岳ニ詣ント、父母之ヲ許ス、然ルニ
帰ル事ノ遲ヲ以テ、父母怪ミテ同行ノ家ニ問ニ、朝熊ヘ行カズト云、
愈怪テ次郎カ寝所ヲ見ルニ一紙ヲ遺セリ、其言ニ我江戸ヘ下リ、奉公

ノ望アル故ニ、今日吉田マデ舟ニテ行ナリ、吾身ニ於テ人ニ対スル誤モ無ク、亦宿債モ無シ、但家中ノ錢一貫文不足スベントナリ、是ニ由テ父母モ捨置タリ、次郎実ハ舟行セズ、途ニ遇タル者アリテ後ニ知タリ、是陸路ナリト云ハ追人アラン事ヲ恐レテ謀レル者ナリ、次郎今歳十四ナリ、是時常晨ノ家来猪野久大夫力弟猪野等室ト云者画工トシテ江戸ニ住シ諸士ニ出入ス、次郎ハ此等室ヲ頼テ下レリ、次郎カ等室カ亭ニ著タル日、亦常晨ノ家来青山長右衛門モ用事ニ由テ江戸ヘ下リ、等室カ家ニ居合セタリ、長右衛門、次郎ニ問テ何ノ為ニ來ルヤト云、次郎奉公ノ望アリテ来ルト答フ、長右衛門云、定テ日来ノウンケン島ヲ憤ルナラント云、次郎微笑ス、是後等室カ取持ニテ御馬預黒澤某ノ家ニ仕ヘシム、甚黒澤氏ノ心ニ称フ故、黒澤氏或時次郎ニ問テ心ニ希フ事ハ何ゾト云、次郎云林家ノ門ニ入テ学問セント欲スト、是ニ由テ黒澤之ヲ林道春ニ告テ門人トシ、黒澤伊勢次郎と号セシム、学日ニ進ム、且諸書ヲ閲ノ次ニ事ノ焉（焉口本作馬）ニ及所アレハ必抄出シテ積テ一巻トシ、之ヲ黒澤氏ニ進ム、其書転シテ台覽ニ供ハリテ名大ニ見ハル、其比雲州松江ノ城主松平出羽守殿ヨリ、門人ノ中一人ヲ請テ儒臣ト為ン事ヲ林家ニ語ル、道春即伊勢次郎ヲ以テ其需ニ応ズ、然シテ松江侯帰府ノ時ニ、琥扈從シテ途ニシテ伊勢次郎願テ云、錦ヲ衣テ故郷ヘモ帰リタシ、又太神宮ヲモ拝シタシト申、即之ヲ許シテ桑名駅ヨリ直ニ山田ニ面シム、且其禄ニ過テ従者行裝華麗ニシテ來テ両宮ヲ拝シ、次ニ常晨ニ見ヘ、且初ノ傍輩ニ対シテ今コソウンケン嶋ヲ見ヨト云、人皆愧テ朱買臣カ妻ノ意ヲ為セリ、是時伊勢次郎黒澤三左衛門ト称ス、其後漸々昇進シテ祿千石ニ及ヒ、松江城ノ家令トナル、伊勢ニハ弘正死シテ子三之丞ト号シ、常有長官ノ官奉行ナリシカ、宝永ノ回祿ニ係

リテ、家室ヲ當ムヘキ力ナキ故ニ、三左衛門ニ金子ノ助力ヲ請フニ、雲州へ來リ寄食セヨト云、由テ妻を携テ出雲国ニ行ク、是ニテ伊勢与村ノ家ハ絶タリ、

以上が、原文である。以下、原文に沿つて解説を加える。

〔1 先祖〕與村弘正（石斎の実兄）の先祖は、北畠氏の庶子である。伊勢国多氣の北畠氏が繁栄していた時、四か村を分かち領した。そのため郷民等は「四村殿」と呼んだ。のちに四を與の字に改めた。北畠氏が滅亡した後、與村氏は伊勢山田の西河原に住んだ。多氣の北畠氏（「多氣御所」）の末裔が住んだ所なので、人々はその場所を「御所ノ世古」と呼んだ。

〔2 家族〕弘正の父も、弘正と同様に「三之丞」と号した。父三之丞には二人の子がいた。兄は弘正で、弟が「次郎」（のちの石斎）である。当時の（外宮の）長官である（桧垣）常晨の「家来分」であるため、いつも（桧垣の）家に仕え、使われていた。

〔3 旅立ち〕次郎は、貧しかつたため、いつも「ウンケン島」（縹緗縞）の服を着ていた。そのため傍輩等が晒つて、彼のことを次郎と言わないで、事あるごとに「ウンケン島」と呼んだ。次郎は少年ながら、この恥に憤つた。そしてある時、父母に告げた。「明日、気のあつたものと同行します。行く先是朝熊岳に詣でる予定である」と。父母はこれを許可した。そうしたところ、次郎が家に帰つてくるのが遅いので、父母は怪しんで、同行した者の家に問い合わせたところ、「朝熊には行つていない」という。いよいよ父母は怪しんで、次郎の寝所を見ると、一枚の紙が遺されていた。そこには「私は江戸に下り、奉公の望みがあるため、今日（三河国）吉田まで舟で行きます。わが身は、人に対する誤りもなく、前々からの借金もない。」と書かれていた。ただし、家中の錢一貫文が不足していた。旅費にあてた

のである。このようない由により、父母も次郎のことを捨て置くこととした。

次郎は、実は舟では行かなかつた。陸路、途中で彼に出会つた者からわかつた。なぜ陸路を取つたかをいうと、次郎を追う人がいた場合を想定して、わざと舟でゆくと謀つたからであつた。

〔4〕江戸の画工猪野等室を頼る〕次郎は、一四歳で江戸に下つた（正確には一八歳である〔後述〕）。（外宮長官桧垣）常晨の家来に猪野久大夫という人物がいた。久大夫の弟である猪野等室が、画工として江戸に住み、江戸の諸士のもとへ出入りしていた。次郎は、常晨の家来である等室を頼り江戸へ下つたのである。

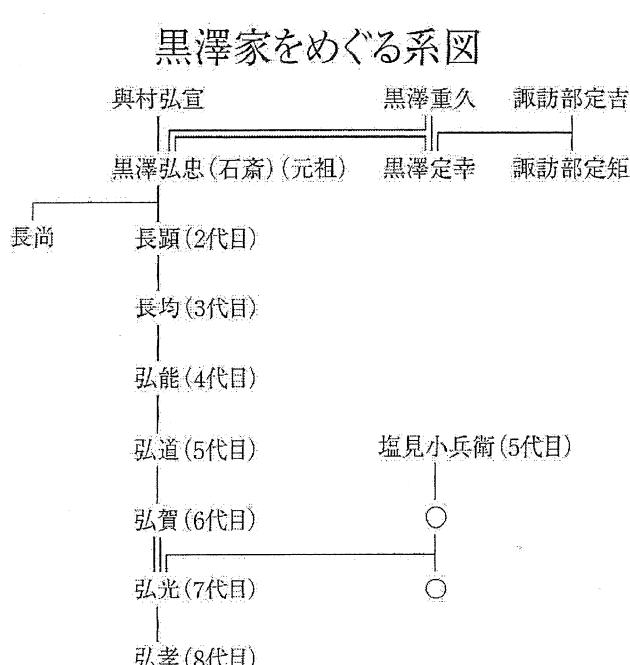
佐野正巳氏は「黒澤石斎とその周囲」〔松江藩学芸史の研究〕において、猪野等室を「狩野等室」と読むが、佐野氏がなぜ「狩野」と読んだのかの根拠が見出せなかつた。そのため本稿では、史料にある通り「猪野」と表記する。

さて、次郎が江戸の等室の邸宅に着いた日、ちようど常晨の家来である青山長右衛門も用事があつて江戸に下つてきており、等室の家に居合わせることとなつた。このとき、長右衛門は次郎に、「何のために来たのか」と問うた。次郎は「奉公の望みがあつてきたのだ」と答えた。長右衛門はさらに言つた「おそらく日来の「ウンケン島」（縹緗縞）と呼ばれたことに憤つたからではないか」と。次郎は、これに微笑した。

〔5〕黒澤氏へ奉公と林家入門〕その後、等室の取り持ちで、幕府の「御馬預」である黒澤某（定幸）の家に次郎は仕えた。そして、次郎が黒澤氏の心にかなつた人物だったので、ある時、黒澤氏が次郎に問うた。「心に願うことは何かあるか」と。次郎は言つた「林家の門に入つて、学問をしたい」と。これにより、黒澤氏はこのことを林道春（羅山）に告げ、次郎は

道春の門人となることができた。

〔6〕林羅山のもとで学ぶ〕林道春（羅山）の門人となつた次郎は、「黒澤伊勢次郎」と号した。この時、黒澤家の家名を黒澤某（定幸）から許されたのである。伊勢次郎（石斎）の勉学は日々進んだ。そして、諸書を閲覧



するついでに、「馬」に関する記事があると、必ず抄出した。それが積もり積もつてついに一巻となつた。黒澤伊勢次郎（石斎）は、これを黒澤氏（定幸）に進めた。その書物が、ついには將軍家の閲覽に供えるものとなり、黒澤伊勢次郎の名は、大いに見えを張るにいたつた。

〔7〕松江藩儒となる〕その頃、出雲国松江城主であった松平出羽守（直政）殿から、林道春へ、門人のなかから一人を松江藩の「儒臣」にしたいと言つてきた。道春は、直ちに伊勢次郎をもつて直政の求めに応じた。

〔8 故郷に錦を飾る〕そのようにして、松江侯（松平直政）が出雲国へ帰國するとき、伊勢次郎も付き従つた。その道中、伊勢次郎は直政に願い出た。「錦を着て故郷へも帰りたい。また太神宮（伊勢神宮）も拝したい」と申し出た。直政はこれを許可した。伊勢次郎は伊勢国桑名駅から、たちに伊勢山田へと向かつた。それと共に、彼の禄に不相応な従者を引き連れ、その行装は華麗であつた。伊勢内宮・外宮を参拝し、次にかつて仕えた（桧垣）常晨に会つた。さらに、かつて伊勢次郎が伊勢山田にいた頃の傍輩に對して、「今こそ「ウンケン島」を見よ」と言つた。かつて、「ウンケン島」と嘲笑した人達は皆、恥じて「朱賈臣か妻」の意味と同じようになつた。

〔朱賈臣か妻〕とは、次の故事をいう。中国前漢の官僚であった朱賈臣（しゅぱいしん）（？）

〔四一五〕の家が貧しく、彼は薪を売つて生活していた。そのようななか、歩きながら読書する朱賈臣の姿をみた妻は、その身を恥じて夫のもとを去つた。のちに会稽の太守として、朱賈臣が故郷を通り過ぎた時、前妻がこれを見て恥じて、自分で首をくくつて死んだという故事である（『広辞苑』）。ここでは、伊勢次郎の出世を見抜けなかつた、かつての傍輩たちに、深い恥じらいの気持ちを起させたことを指している。

そしてこの時、「黒澤伊勢次郎」ではなく、「黒澤三左衛門」と称した。「伊勢次郎」という仮名から「三左衛門」と官途を含む通称へと変えて、故郷に錦を飾つたのである。

〔9 松江城家令〕その後、漸次昇進して、一〇〇〇石の禄を得るようになり、「松江城ノ家令」となつた。「家令」とは、ほんらい三位以上の公卿の家に設置する職員で、その家の家務を統括するものをいう（『日本国語大辞典』）。ここでは、松江城の主、松平家の家務を統括するものをいう。す

なわち松江藩は藩主の意向が政治に反映されるため、藩政を掌る人物だつたということになる。

〔10 伊勢の與村家を出雲へ呼ぶ〕黒澤三左衛門（石斎）の実家、伊勢国山田の與村家は、その後どのようになつたのか。三左衛門の実兄弘正は死去し、その子は「三之丞」と号して、長官桧垣常有の「宮奉行」を勤めていた。しかし、宝永年間（一七〇四—一二）に火事に遭い、日々の暮らしに窮するようになった。そのため三左衛門に金錢の助力を請うた。三左衛門は與村三之丞に、「出雲国へ来て、寄食しなさい」と言つた。これにより、三之丞は妻と共に出雲国へ行き、伊勢の與村の家は絶えることとなつた。

以上から、これまで詳しく判つていなかつた石斎の出奔の動機や、林家の仕官、通称の変遷、與村家のその後など、事細かに明らかとなる。これららのエピソードを、省略とまとめにより、綴つたのが『度会人物誌』だつたのである。

二 馬術の伝統を諏訪部家から受け継ぐ

1 黒澤定幸

次郎（石斎）が仕えた黒澤定幸（杏助）は、幕府の旗本で馬預の役を勤めていた。黒澤家は、記紀伝承で第八代の天皇とされる孝元天皇の第一皇子である「大彦命」の系統といふ。大彦命の子に「建沼河別命」（『断家譜』黒澤の項では「武渟河別命」と表記する）がいて、その子「豊韓別命」の流れが、のちに穂積氏や安部氏、阿閉臣、伊賀臣など七族のとなるといふ（『群書類従』卷六〇所収「本朝後胤紹運録」）。

『断家譜』黒澤の項では、大化の革新の折、左大臣となつた「倉橋麿」

|| 阿部倉橋麿『公卿補任』の末裔に「安倍安大夫頼良」がいて、頼良の四男「小松館境講師官照」の跡を継いだのが、「黒沢尻五郎正任」の子「小松館二郎重任」とし、その一七世が「小松李助重光」だとする。「小松李助重光」は定幸の祖父である。黒澤家が安倍姓を名乗る根拠を、系譜の上で説明したもので、事実か否かは定かではない。

『断家譜』で詳しい来歴を記すのは、「小松李助重光」の子重久からである。重久は、もともと父の通称を受け継ぎ、「小松李助」と名乗っていたが、後に「黒沢次右衛門」に改めたという。生まれは出羽国で、天正一九年（一五九一）に徳川家康に目見し、武藏国都筑郡内に「二五〇石を得た」という。関ヶ原の戦いや大坂の陣に供奉し、元和四年（一六一八）正月二〇日に没した（法名、月渓休罷）。六四歳というから、弘治元年（一五五五）生まれということになる。

重久の子定幸は、もと「黒沢長六郎」と名乗り、のちに父の通称「李助」を受け継ぐ。『断家譜』には、「実諏訪部宗右衛門定好^吉二男」とあるので、重久には実子がなく、養子を諏訪部家から迎えたものと考えられる。生まれは大和国で、慶長一〇年（元和元年「一六一五」）に徳川家康に目見した。

同年の大坂夏の陣では、松平正綱組として供奉し、翌年初めて二代将軍徳川秀忠に目見し、大番となつた。その後、父の跡を継ぐ。寛永二年（一六二五）に武具や馬を出す用意がきちんと整つていたことに対し、三代將軍家光から褒美を与えられ、上野国緑野郡内に「一〇〇石を加増された（「武具戒馬厳整御褒美」）。黒澤家として、馬の扱いに長けていたことを示す、初めての記事である。

馬の扱いに長けていたことが認められたためか、二年後（寛永四年）に幕府の「御馬預」の役を勤めることとなる。寛永九年前将軍秀忠の死に

際しては、遺物として金六〇両を幕府から拝領するまでになつていて。彼は、寛文一一年（一六七一）三月一日に病没し、江戸市谷の長延寺に葬られた（法名、瑞川院祥山秀峯）。年齢は不詳であるが、その初見から五六六年後であるので、六〇歳前後と推察される。

2 諏訪部定吉

與村次郎（黒澤石斎）を義弟に迎えた定幸で特筆されることは、定幸の養父重久には見出せない、馬術に長けている点である。なぜ定幸は馬術に長けていたのか。この点について注目されるのが、定幸が諏訪部家から黒田家へ養子に入つていることである。次に見るように、諏訪部家は馬術に秀でた家であった。

『寛政重修諸家譜』諏訪部（清和源氏満快流）の項によれば、諏訪部家はもと信濃国諏訪社において元服した「幸扶」という人物の由緒によつて諏訪部と名乗つたという。その子孫で、定幸の曾祖父定次は「馬術に長ぜるを以て、北条氏政に仕ふ」とあり、馬術に秀でていたため、関東の戦国大名北条氏に仕えることができたのである。定次の子定吉は、初め北条氏政・氏直に仕え、豊臣秀吉による小田原攻めで氏直が高野山へ追放されると、これに従つた。文禄元年（一五九二）の秀吉による朝鮮出兵時、肥前名護屋で徳川家康に拝謁し、四年後（慶長元）家康から相模国高座郡内に「三三〇石を得た。関ヶ原の戦いにも参陣した。慶長二年（一六〇七）七月三日、定吉は、かつて「八条近江守房繁伝來の馬術」に長じていたため、幕府の「御馬」のことを受け持つこととなつた。定吉は、その後も出世し、八五〇石取となり、晩年には家康の「御夜話の席」に伺候するまでになつた。

右から、諏訪部家の馬術が、「八条房繁」の流派である八条流であることがわかる。この馬術をもつて幕府の馬預の役に関わることとなつたのである。後に松江藩が八条流馬術を取り入れているのも、この諏訪部家から黒澤石斎へと継承されたことによる可能性がある。

定吉の子定矩は、慶長一四年（一六〇九）に初めて将軍徳川秀忠に拝謁し、その後、両度の大坂の陣に井上正就組に属して供奉した。元和七年（一

六二二）から幕府の「御馬」のことを任せらる。彼も諏訪部家に伝わる馬術に秀でていたためであろう。彼は、のちに良馬を選ぶため、しばしば陸奥国や武藏国府中へと赴いた。承応二年（一六五三）一二月二二日に父の跡を継ぎ（この年五月一日に父定吉は死去）、幕府の「御馬預」となり、万治二年（一六五九）に致仕した。わずか六年の「御馬預」であつた。隠居料として廩米二〇〇俵を幕府から受けた。そして寛文元年（一六六一）四月二三日に死去し（法名、元入）、江戸雜司谷の法明寺に葬られた。その後、諏訪部家は代々、同寺を葬地となつた。

3 「驪黃物色図説」

黒澤石斎の義兄であり、諏訪部家から黒澤家に養子となつた黒澤定幸が編纂したとされるものに「驪黃物色図説」がある。のちに義弟石斎（弘忠）が校正して正保四年（一六四七）に完成した書物である。国立公文書館所蔵本には「黒澤定幸編輯、弘忠校正」とある。しかし、『寛政重修諸家譜』諏訪部定矩の項によれば、定幸の実兄定矩が「御馬預」役を辞めるまでに「驪黃物色図」二巻を著したとしている。

定幸に本来入れるべき記事が、兄定矩の項へ誤つて記された可能性がある。しかし、諏訪部系譜の定幸の項は黒澤家へ養子に行つたとのみ記し、

詳しい事跡を記していないこと、および諏訪部系譜は諏訪部家が幕府へ提出した系譜であるから、諏訪部家では、定幸の実兄定矩が「驪黃物色図説」に関与していたことを、正直に記したのではないだろうか。「驪黃物色図説」は定幸が編纂のであつて、八条流の馬術を伝授している諏訪部家の者達も関与して完成したものと考えるのが妥当である。

4 幕府の「御馬預」の家——諏訪部家のその後——

さてその後の諏訪部家を略述しておく。諏訪部の嫡流は定矩の嫡子定直まで幕府の「御馬預」となるものの、その後は大番止まりとなり、馬術で仕えることはなくなつた。定直の弟定治も幕府の「御馬方」を勤め、陸奥国にまで馬を求めて旅立つが、元禄一四年（一七〇一）に失態があり小普請へと格下げとなり、以後馬術での勤めはなくなる。諏訪部家の馬術は、定矩や定幸の弟成定の家が、分家ながら幕府の「御馬預」を勤めてゆくこととなる（以上『寛政重修諸家譜』諏訪部「清和源氏滿快流」の項による）。

以上、この節では、黒澤石斎が多く影響を受けた馬に対する知識は、黒澤家が代々受け継いできたものではなく、義兄定幸の実家諏訪部家が受け継いできた馬術の知識であつたことを明らかにした。諏訪部家は、戦国大名北条氏に馬術で仕える家であり、八条房繁に始まる八条流の馬術を伝授した家であった。のちに石斎が校正を行う、義兄定幸が編纂した馬についての図説「驪黃物色図説」も、定幸の実兄定矩が関わり完成したものであったのである。実家諏訪部家が黒澤定幸や石斎に与えた影響は大きいものがあつたといえよう。

5 旗本黒澤本家のその後——幕府馬預の家——

さきに石斎の義兄定幸について述べた。ここでは、江戸旗本の黒澤家のその後について、明らかにしておく。この家は『断家譜』にその系譜が載せられているように、最終的には断絶する家である。

定幸の跡を継いだ次郎兵衛は、明暦元年（一六五五）九月一五日に将軍

徳川家綱に目見し、寛文三年（一六六三）一一月一九日に部屋住みから大番へと入る。同一一年（一六七二）七月八日、父の死後、黒澤家を継ぎ、三九一石を得て、幕府の馬預となり、二年後（寛文一三）の四月一八日に死去し、父と同じ長延寺に葬られた（法名、陽仙院一桃宗見）。將軍家綱の目見から一八年しか経つておらず、おそらくは二〇歳代での死去だったのではないか。

次郎兵衛が馬預を勤めたのがわずか二年ばかりであり、かつ若くして亡くなつたためであろうか、彼の跡を継いだ定当以降の黒澤家当主は、馬術で幕府に仕えることはなかつた。定当は小普請、腰物奉行などを勤め、その子定紀も「御鉄炮方後見」、寄合を勤めた。

江戸旗本黒澤家の最後の当主は、定紀の子李之助（主殿）であつた。彼の妹は、幕府老中である田沼意次の後妻となつてゐる。李之助は江戸に生まれ、寛保三年（一七四三）一〇月三日に父の跡を継ぎ五九一石を得てゐた。小普請に入り、北条氏庸の支配に属した。翌年（延享元年）家督継承に対する「継目御礼」の銀・馬代を幕府へ献上している。しかし、その後、金田正甫（采女）の支配に属した寛延三年（一七五〇）九月二七日に「重追放」されている。年は二六歳であつたといふ（以上『断家譜』黒澤〔安倍〕の項）。追放の理由は不明である。しかし「重追放」＝再度の追放とあることから、若くしてその素行に問題があつたと考へられる。この少し後

から幕政で田沼意次が活躍するが、妻の実家の黒澤家は断絶することとなる。

以上、江戸の旗本黒澤家が、馬術で幕府に仕えることがなくなり、一八世紀半ばにはついにその家が断絶したことを明らかにした。

6 伊勢與村家のその後

次に石斎の実家である伊勢山田の與村家についてみる。伊勢の與村家は「廻炉間談」にあるように、外宮長官桧垣氏に仕えていたが、宝暦の火災により、生活に困窮し、ついには出雲国にいる石斎へ無心を働くようになつた。結局、石斎の計らいにより、出雲国へ来て、黒澤家で「寄食」することとなる。これにより、伊勢山田における石斎の痕跡はなくなることとなる。そのため黒澤家は、松江藩に仕えた石斎の系統のみ存続することとなるのである。

7 「廻炉間談」と『雲陽誌』

「廻炉間談」（四七六頁）には、石斎の子の長尚が著した『雲陽誌』についての記述もあり、次の様に記す。

出雲國中ノ神社仏寺ヨリ山川名勝を細ニ記セル書アリ、雲陽志ト号ス、凡テ十卷アリ、一郡ヲ一巻トス、國主ヨリ儒臣ニ命シテ偏選セシムル者ニテ、他國ヘ出サル者ナリ、風土記、懷橘談等ノ及フ所ニ非ス、余大坂ニ寓スル時、雲州侯ノ家臣黒澤源兵衛ト云者ニ傾蓋シテ、是書ヲ閲ル事ヲ得タリ、此源兵衛ハ黒澤三左衛門カ孫ナリ、然レトモ実ノ血脉ニハ非ス、傍輩ノ中ヨリ養子ナリ、時に大坂屋敷ノ留守役タリ、（）からは次のことが明らかになる。

- 1 「雲陽誌」は出雲国外へ持ち出すことを禁じられていた書物であった。
- 2 松江藩の大坂屋敷の留守居に石斎の孫黒澤源兵衛がいた。しかし彼は傍輩のなかから養子となつたもので、石斎との血のつながりはない。
- 3 「雲陽誌」は一郡一卷で全一〇巻、出雲一〇郡を説明する書物である。
- 4 「廻炉間談」一巻は、早清（度会）清在が、享保一九年（一七三四）に完成させ、清在が見聞きしたものの中かで、人に語ることのできるものを収載し、内容は多岐にわたる。

清在は、『雲陽誌』完成（一七一七年。『大日本地誌体系 雲陽誌』芳賀

登氏の解題）の一九年後の元文元年（一七三六）に没しているので、この間（一七一七—三六）に大坂で清在が知り得た情報であつたと考えられる。

三 黒澤長顕著「安氏家厳年譜」

黒澤石斎について最も信頼できる史料は、石斎の長男である長顕が著した父の年譜「安氏家嚴年譜」であろう。この史料は、黒澤家所蔵で、現在

松江歴史館が保管している。縦二八・四×横二一・四寸の冊子で、表紙は上部が欠けている。全三三丁のうち最後の九丁は白紙となつていて、石斎が生まれた慶長一七年（一六一二）から亡くなる前年まで、一年毎に出来事を記している。六七歳で亡くなる前年の延宝五年（一六七六）で筆が止まっていることから、延宝五年頃にまとめられたものと考えられる。年譜の最初には「賤息於兎丸編録」とあり、既に成人となつていたにもかかわらず、自らを卑下して「賤息」とし、長顕の幼名「於兎丸」が編纂したとする。長顕にとって、父石斎をいかに敬つていたかが窺われる。黒澤家に伝来するものであり、長顕自筆の原本と判断される。書名は、黒澤家が安

部姓を名乗つたので「安氏」、「家嚴」＝父なので、安部姓を名乗る父、即ち黒澤石斎の年譜という」とになる。

「安氏家嚴年譜」慶長一七年条は次のように記す。

家嚴勢州度会郡人、姓源、氏與邨（村上帝庶流）、其父諱弘宣号三丞、母源氏（清和帝之後胤能呂氏庶流）有女則母儀、兄弟三人、伯曰定幸（嗣他姓安倍、孝元帝之庶流、号申如窩）、仲曰弘正（号求文窩）、家嚴其季子也、^生於是歲秋七月癸巳朔壬子（廿日）寅時、字隣、卦

正当華初六、

石斎（弘忠）は伊勢国度会郡の人で、姓は源、氏は「與邨」、父の名は弘宣で、「三丞」と号した。母も源氏である。三人兄弟で、長兄を定幸といい、定幸は他姓である安倍を継ぎ、「申如窩」と号した。次兄は弘正といい、「求文窩」と号した。石斎（弘忠）はその末子で、この年の七月二〇日寅時に生まれた。與村弘宣の実子は弘正と弘忠（石斎）の二人で、定幸は旗本の黒澤重久の子であるが重久の養子であるので、年譜では定幸が「安部」を継いだと記す。

以下、「安氏家嚴年譜」に沿つて、石斎（弘忠）の事績を追うこととする。

五歳で実父弘宣と外祖父久義を亡くした石斎（弘忠）は、七歳で「蘿子瞻」「孝行詩」「八景詩歌」「長恨歌」「琵琶引」「野馬台詩」「勸学文」等を暗誦した。八歳で俳諧を吟じ、淡水軒（名は及居）という人物が感心したという。九歳で意松軒（名は玄昌）に師事し書法を学び、「大學」「中庸」その他、和漢の書を学ぶ。一〇歳で「久五郎」と号し、「貞永式目」「庭訓往来」「倭歌朗詠集」等の書を読んだ。一一歳の時、外祖母を亡くし、一二歳で元服して「弘忠」と名乗つた。いずれも伊勢での出来事である。一五歳の寛永三年（一六二六）正月に、度会貞晨の計らいで光倫寺の僧（名は

黒澤石斎著述一覧

30タイトル 200巻以上 (出典「安氏家厳年譜」)

和暦	西暦	年齢	書名	巻数	補注
寛永9	1632	21	玉瓦詩囊	1巻	
寛永12	1635	24	石竹叢	1巻	
寛永13	1636	25	寛永日録	若干巻起筆	明暦3年(1657)の江戸の火事で焼失
寛永14	1637	26	歌括蜜藏馬経	1巻	
寛永15	1638	27	人馬無労集	12巻	
			正字馬経	1巻	
寛永16	1639	28	金屑集	1巻	
寛永17	1640	29	知非稿	1巻	明暦3年(1657)の江戸の火事で焼失
			相驥鑑	1巻、注解8巻、全13巻、或問1巻	黒澤定幸・石斎共著
			乾坤墨談	20巻	
寛永18	1641	30	神器伝授図説	上2巻、下2巻、全4巻	
			寛永諸家系図伝	清和源氏の項	幕府編纂。8名で編纂
寛永19	1642	31	就道正語	1巻	
正保4	1647	36	驪黄物色図説	3巻	黒澤定幸撰、石斎草稿、斎藤尚信図
慶安元	1648	37	河豚居士伝	1巻	
			友故錄	1巻	
慶安4	1651	40	茶事記	1巻	
			聲談	1巻	
承応2	1653	42	懷橘譚(懷橘談)	2巻	西海道ノ紀行、雲州風土
明暦元	1655	44	全像本朝古今列女伝(本朝列女伝)	10巻	
万治3	1660	49	王師纂経	3巻	
			正路指南	起筆	
			孟子諺解	起筆	
寛文2	1662	51	和歌權輿集	2巻	
寛文5	1665	54	詞林翹楚	1巻	藩主松平直政の命により撰す
寛文7	1667	56	雲国侯直政君年譜(雲国侯年譜)		藩主松平綱隆の命により編集
			諸土録(列士録)	編纂始まる	藩主松平綱隆の命により輯録
寛文10	1670	59	仁和楽図	2巻	
			彝倫和歌集	10巻	
延宝4	1676	65	本朝事物権輿	100余巻	

清玄)について「孟子」を習い、一六歳で叔父の度会常晨を頼つた。

そして一八歳になつた寛永六年(一六二九)三月二十四日に、秘かに伊勢を出て江戸へと向かう。「安氏家厳年譜」は、事実関係をあつさりと記すに過ぎないが、この時のエピソードは、「囲炉間談」に記す通りであり、画家猪野等室を頼り、黒澤家との関係を築いたものと考えられる。

江戸での活動は、一九歳の寛永七年七月、黒澤定幸の実父である諏訪部定吉と陸奥・出羽に赴き、九月に江戸へ帰ってきた。この後も度々、東北地方へ向かうのは、同地方が馬の産地であったからであろう。諏訪部家が馬術に長けた家であり、黒澤家が幕府馬預を勤める旗本であることも関係する。石斎(弘忠)が、黒澤定幸の信頼を得たのも、このような旅で培われたものと考えられる。同年一〇月には、黒澤定幸に従い定幸の領地である上野の柴村へ行き、一一月には幕府関係者と会つたと「安氏家厳年譜」は記す。

二一歳の時、「玉瓦詩囊」一巻を執筆した。初めての著作である。これ以後、六七歳で亡くなるまでの四六年間に、三〇タイトル、二〇〇巻以上の書物を石斎は著す(「黒澤石斎著述一覧」参照)。ただほとんど現存していないため、書物の内容は多くが不明である。

二二歳の時にも黒澤定幸に従い陸奥国へ赴き、二三歳の寛永一年五月には定幸と共に京都へ行く。そして母の安否を尋ねるために、七月に京都から伊勢へ立ち寄り、九月に京都から江戸へと帰つた。この時、自らを「華居士」と号し、「孝盤窓」の扁額を居宅に掲げたと「安氏家厳年譜」は記す。二四歳の時、江戸で「石竹叢」一巻を完成させ、翌年「寛永日祿」を起筆した。二六歳の寛永一四年九月には「歌括蜜藏馬経」一巻を完成させた。

二七歳の同一五年正月には「人馬無労集」一二巻と「正字馬経」一巻を

完成させた。「人馬無効集」と「正字馬経」の中身は不明ながら、タイトルから馬に関わるものと考えられる。弘忠（石斎）の馬への関心は、「二馬術の伝統を諏訪部家から受け継ぐ」で述べたように、馬術に造詣が深い諏訪部・黒澤両家と共に行動したことに始まると言えられる。その最初の書物が黒澤定幸に従つてから九年目に著され、これが二年後の「相驥鑑」（寛永一七年）や、その六年後に完成した「驪黄物色図説」（正保四年）へと、馬の研究は集大成されていく。

石斎（弘忠）は、肥前国で起こつた島原・天草一揆を見に行こうとして、寛永一五年正月に筑紫国へ向かう。途中、摂津国難波から船仕度をしようとしていたところ、一揆は鎮圧されたので、仕方なく筑紫へは行かず、伊勢に立ち寄り、四月江戸へ帰つた。この年は、八月に定幸の采地である武藏国小林村で領民の争いがあり、弘忠（石斎）が現地に赴いて裁いた。

この年、弘忠（石斎）は幕府の儒者である林羅山の門弟となる。二七歳の時である。「安氏家嚴年譜」には、一〇月に林羅山にまみえ、「聖經」を学び、以後毎年、元旦に羅山父子三人に詩を送り、返詩をもらうようになつた、とさらりと記すが、羅山の弟子となる過程は、「囲炉間談」に記す通りなのである。

翌年九月、二八歳の弘忠（石斎）は、黒澤定幸に従つて陸奥・出羽に赴き、津軽半島の外浜まで行つた。この年、「金屑集」一巻を完成させ、翌年正月一日に陸奥から江戸に帰つてきた。この時の紀行文のなかに、石斎（弘忠）の詩歌があり、林羅山・春恕・秀才ら父子がこの詩歌の韻を取つて歌を作つた、と「安氏家嚴年譜」は記す。

陸奥から帰つた年、弘忠（石斎）は「相驥鑑」一巻、注解八巻、全一三巻、或問一巻を完成させた。「相驥鑑」は馬に関する研究書で、黒澤定幸と

石斎が撰し、林羅山と朝鮮の学者朴真卿が序文を付した。また法眼正意が抜粋を作つた。この年、「知非稿」一巻、「乾坤墨談」二〇巻も完成させた。

そして翌寛永一八年（一六四一）三月一六日、三〇歳の弘忠（石斎）は松江藩主松平直政に召しだされることとなる。

小括

一・二・三において、黒澤石斎（弘忠）が松江藩の儒者となるまでを明らかにしてきた。一では、これまで根拠とされてきた一九三四年刊行の『度会人物誌』の記事が、享保一九年（一七三四）に完成した喜早（度会）清在の隨筆「囲炉間談」を省略し、まとめたものであることを明らかにし、「囲炉間談」記載の石斎の事績を追つた。

二では、石斎（弘忠）が馬に関する書物を執筆・編纂することになる理由を明らかにした。與村弘宣の子の弘忠（石斎）が、黒澤の名字を名乗ることを許した黒澤定幸は、黒澤家に養子に入った人物で、八条流馬術に長けた諏訪部家の出身であった。定幸が旗本として幕府の馬預を勤めたのも、諏訪部家から受け継いだ馬術の知識があつたからである。定幸の実兄諏訪部定矩や黒澤定幸らと共に石斎（弘忠）は、名馬の産地である陸奥・出羽へと赴き、親交を深めて信頼を得ることで、馬に関する書物を彼らと共同で編纂するに到る。また諏訪部家が受け継いだ八条流馬術が、黒澤家を通して松江藩へも取り入れられた可能性を指摘した。その後、旗本黒澤家は断絶し、伊勢與村家も松江へ来たことにより、松江藩の黒澤家のみが残ることとなつた。

三では、石斎の子長顕が、石斎生存中に書いたと考えられ、信頼性の高

い石斎年譜「安氏家歴年譜」に基づき、その足跡を明らかにした。この年譜は、「因炉間談」のような逸話は載せてはいない。しかし、石斎が著した書籍が三〇タイトル、二〇〇冊以上にのぼることが明らかになるだけでなく、石斎の事績の正確な年次を確定することが出来る点で、石斎の事績を窺う根本史料となるものである。

三〇歳になつた石斎は、どの様にして松江藩主松平直政に召しだされていくのか。また石斎の藩儒としての活動や学問はどのようなものであつたのだろうか。後日を期したい。

(にじま・たろう 松江歴史館学芸員)

松江歴史館

研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題	西島 太郎	1
松平斉貴の上洛道中記録に見る旅の姿 ——「御上京一途」を参考として——	小山 祥子	27
松江藩儒黒澤石斎の研究（一）	西島 太郎	37
二人の甫庵 ——小瀬甫庵と山岡甫庵——	福井 将介	50
堀櫻山・市郎父子に関する新知見	西島 太郎	73
——展覧会開催後の調査より——		
資料紹介 安達家文書目録・翻刻（一）	新庄 正典	101
「三谷家住宅」調査報告書	足立 正智	130(31)
高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について	西尾 克己	160(1)
——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——	稲田 信	
	木下 誠	

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理	大塚 享義	122(39)
平成24年企画展 「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島 太郎	109

平成25年3月



MATSUE HISTORY MUSEUM

BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

Current Status and Issues of research MATSUE castle town-----	NISHIJIMA Taro	1
The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" -----	KOYAMA Sachiko	27
Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar of MATSUE clan vol.1 -----	NISHIJIMA Taro	37
A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" ---	FUKUI Masayuki	50
New knowledge about the father and son REKIZAN and ICHIRO HORI-----	NISHIJIMA Taro	73
Document introduction : A list and reprint of the document of ADACHI (安達家) vol.1 -----	SINSYO Masanori	101
Investigative report of MITANI house-----	ADACHI Masanori	130 (31)
Religious background of early modern times ----- daimyo graves and the Horios	NISHIO Katsumi	160 (1)
	INATA Makoto	
	KINOSITA Makoto	

◆MUSEUM STUDIES◆

Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum -----	OTSUKA Takayoshi	122 (39)
Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson. Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition -----	NISHIJIMA Taro	109

Published by

Matsue History Museum

Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要 第三号

編集・発行 松江歴史館

住 所 島根県松江市殿町二七九番地

F A X 電話 〇八五二一五五一六〇七
〇八五二一三三一一六一一